

クワジーマード詩集

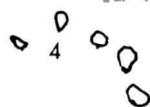
قوس قزح



- a. リグリア地方
- b. ロンバルディア地方
- c. エミリア地方

(Liguria)
(Lombardia)
(Emilia)

井手正隆訳



クワジーマド詩集

訳者 井手正隆

発行者 小田久郎

発行所 株式会社思潮社

〒102 東京都新宿区市谷砂土原町三・一十五

電話三二六七・八一五三(営業)八一四一(編集)

FAX(三二六七)八一四二振替東京八・八一二一

印刷所 相良整版・福田印刷

製本所 河上製本

発行日 一九九二年六月二十日



クワジーマド詩集

井手正隆訳

思潮社

クワジーモド詩集

井手正隆
訳

詩集『水と土』より

そして まもなく夕暮が 10

ティンダリに吹く風 10

そして お前は白い服を着て 13

牡羊座 14

死んだ水 15

古代の冬 17

死者達 18

形はどれも私のなかで崩れ失われ 19

詩集『沈んだ木笛』^{ナグサエ}より

沈んだ木笛 22

ユーカリの木 23

言葉 25

ある修道士の聖像の嘆き 26

ローヤ川の河口 28

森は眠る 29

夜に 30

島 31

私の日をお返しください 33

天使 34

詩集『エラートとアポリオン』より

アーナボ川 38

詩集『新詩集』より

アグリジェントの道 42

ランブロ河の岸辺で 43

踊り子クマーニのための哀歌 47

月と火山の馬 49

詩集『来る日も』より

柳の枝に 54

手紙 55

一九四四年一月十九日 56

来る日も 58

おそらく愛は 59

ミラノ 一九四三年八月 60

壁 61

おお 私の優しい動物達よ 62

おそらく墓の上に書かれて 64

海の音が まだ 聞こえる 65

現代人 66

詩集『人生は夢ではない』より

南への悲歌 70

ピーチエ・ドネッティのための墓碑銘 72

詩集『見せかけの緑と真実の緑』より

讃歌 76

詩集『比類なき土地』より

父親に 80

兵士達も夜になると涙を流す 83

詩集『与えることと持つこと』より

ヴァルヴァラ・アレクサンドロフナ 86

ひとりのスパイへの言葉 88

島には 89

リグリアのために 92

花はあるが 夜ともなればポプラの木を招いて 94

年譜
136

あとがき
132

解説
102

注
97

詩集『水と土』より

そして まもなく夕暮が

ひとすじの日の光に射ぬかれて

大地のまうえに人はみな だれもひとりで立っている、
そして まもなく夕暮が。

①
ティンダリに吹く風

②
神の愛に溢れる島々の

水辺に懸かる広々とした丘のひとつ
ティンダリよ、お前が優しいことを

私は知っている、

いま お前は私を襲ってくる

私の心の奥底に身をかかめるようにして。

崖を越え風切る峯を登りつめ、

松の林に吹く風に身を沈めれば、

やがて 軽やかに 連れ立ってきた仲間達も

離れて いつしか 遠く、

その声と思いやりが波のように伝わってくる、

すると その時 私心をさいなんだ

お前が私をつかまえる

やがて 影がさし あたりは静まりかえり不安がこみあげてくる、

かつては いつも 優しい憩いの場であったのに

それを思うと 魂は消え入るような思いに。

お前には見知らぬこの土地で⁽³⁾

暮れては明けて沈みこみ

それでも 隠れて詩句をはぐくむ、

新しい光がさして 窓ガラスに

お前の夜の衣装が薄くはがされるのが映る、

すると 今の私には手が届かない悦楽が

お前の膝の上にある。

流浪の身の辛さ、

心安らかに お前に寄せた私の思慕も

今日は 早くも 死をおそれる不安に変わる、

愛はそれぞれ悲しみを隔てる壁なのか、

暗黒に無言で足を踏み入れる

そこはお前が私に苦いパンをちぎらせたところ。

帰っておいで さわやかに ティンダリ、

優しい友よ 私の目を覚ましておくれ

そうでない崖から飛び降りるかも知れないのだから

心の奥底にしみ入る風が私を見つけ出してくれたことを

知らない人には、恐がっているそぶりをすればよいのだ。

そして お前は白い服を着て

お前は頭をかしげて私をのぞきこむ、

白い服を身につけたお前、

左の肩にほどけた刺繡レリスから

乳房のひとつが そっと 顔を出す。

光が私をつらぬき 震え、

お前のむき出しの両腕をかすめていく。

今度は私がお前をのぞきこむ。

急に お前は言葉を閉じてしまった、

サーカスの哀切をわきまえた

ひとつの人生の重みのなかで

言葉は生き返った。

道は奥深く

吹きおろす風の

そんな三月の夜が続いて、

やがて 初めての時のように

互に そ知らぬ顔で目を覚ました。

牡羊座

天がだるそうに歩きはじめると

その季節がやってくる、新しい風が吹いて、

アーモンドの木を揺らすと

晴れやかにするのだ 風立つ広野と

影さす雲とライ麦を。

そして 季節は 河床と 堀の

可愛い童話の日々の

埋もれた声を取り戻す。

草木はどれもこれも枝を伸ばしていく、

凍りに縛られた月桂樹は不安になつて

遠く離れた水をつかまえる 裸の異教の神々。

見てごらん 水が小石の間の深みから吹きあげ

裏返しになつて 青々と 眠っている。

死んだ水

よどんだ水 沼は眠る⁽⁵⁾

水に漬かった毒の薄い膜を広く重ねて、